

高度医療へき地でも



送られてきた映像に書き込みを入れながら助言する徳永助教＝徳島市の徳島大学蔵本キャンパス（画像の一部を加工しています）

徳大―三好病院間に新システム

映像共有し手術助言

徳島大学病院と県立三好病院を専用通信回線で結んで映像をやりとりし、遠隔地から手術を支援するシステムが本年度、導入された。大学病院の専門医が映像にタッチパネルで書き込みをしながら具体的な指示を送ることができ、へき地でも高度な医療の提供が可能になった。4月に導入して以来、システムを使った手術はほぼ毎週行われており、累計11件になった。

4月導入以降11件実施

従来から整備されていた光ファイバー回線のV PN（仮想専用回線）を使うと、三好病院から約70キロ離れた徳大病院にハイビジョン映像を0・2秒・25秒程度のタイムラグで伝えることができる。県が約200万円をかけ、タッチパネルで画面上に書き込みできる機能を追加。手術中のリアルタイムでの具体的な指導が可能になった。

7月に三好病院で行われた直腸がんの大腸切除手術では、徳大病院のカーンフアレンス室のモニタ―に三好病院で行う腹腔鏡手術のカメラ映像が映し出され、徳大病院の徳永卓哉助教が執刀医にアドバイスを送った。

この手術は周囲の神経や臓器を温存しながら大腸を剝離する必要があり、剝離箇所を間違えると大量出血や合併症の危険がある難しい手術。徳永助教は画面上に線を書き入れながら、剝離場所を伝えたり、視野の確保の方法を教えたりした。

遠隔指導は、医学生が地方病院の医療に関心を高めるきっかけともなっている。この日の手術は徳大医学科5年生が徳永助教の説明を受けながら見学。外科医を目指しているという山下太一さん（23）は「将来、地方での勤務を考えている。技術が落ちないか不安があったが、大学病院の先生に指導してもらえると術力の向上につながると思う」とシステム導入を歓迎した。

徳大病院消化器・移植外科の島田光生教授は「遠隔指導を行うことでへき地でも高度な医療を提供できる。医師にとっても専門医から高度な指導を受けられるメリットがある。へき地を希望する医師が増えてほしいという期待もある」と話した。

（佐藤聡美）